

# クサムスビ

EXTRA  
ISSUE



山学生 × 立川志らら × 浄光寺

## 第二回 おまちなみ

五月九日(金)

法話 浄光寺住職  
落語 立川志らら



五月九日(十一日)までの三日間にわたり、立川流一門の立川志ららさんと立川吉幸さんをお招きして「第二回おてらくご」が開催されました。落語を縁として気軽に仏法にも触れていただくこうと昨年初開催された「おてらくご」。今年は、会場を七カ寺(八公演)に増やし、より多くの地域の方々にご参加いただきました。当寺では、九日・午後二時と七時からの二公演が行われ、落語は共に志ららさんに担当していただきました。

昼の部では、森山町小学校の四年生と五年生、一〇八人と近所のダイサービスに通う方々にご参加いただきました。まずは、住職による「おはなし」。イラスト等を使用して仏教と落語の深いつながりについてお話しをしつつ仏法にも触れていただきました。続いて、おまちなみ立川志ららさんの登場。演目は「ちりとてちん」と「たぬきの札」。果たして古典落語についてこられるのかというこちらの心配も杞憂に終わり、身体をのけぞらせ

ての大笑い。終始笑い声が本堂に響き渡りました。時代や世代を超えて人を魅了する、古典落語の懐の深さと落語家さんの表現力に驚かされたことでした。そして最後は落語家さんへの「質問コーナー」。手が次々と挙がり、時間いっぱいまで質問が止むことがありませんでした。あっという間の一時間半でしたが、子供達もしっかりと仏教の世界と笑いの世界に触れていただいたようで、皆さん笑顔での閉幕となりました。

後日、今回の落語が縁となり小学校の言語学習の一環として落語が取り入れることになり、さらに「落





語クラブ」も発足するそうです。来年は子供達に落語を披露していただけるかもしれませんね。

**夜**の一般の部では、まずは皆さんと『正信偈』の唱和。そして住職の法話。本堂を真っ暗にして地獄絵をプロジェクターに映し出しての恐怖の地獄ツアー。地獄絵を通して普段の私たちの在りようについてお話ししました。続いて、志らさんの落語。そして最後は住職の感話で締めくくられました。この日は、

二公演合わせて二百人を超える方々に足をお運びいただきました。

またスタンプリイ効果もあり三会場、四会場と足を運んでくださる方も多数いらっしゃり、七方寺の参加者も総勢六五〇人にのぼり、おかげさまで各寺院とも盛況のうちに幕を閉じることができました。

尚、当日の「おてらくご」の様子は、動画投稿サイト「YOUTUBE」にてご覧いただけます。

### 鈴木大拙館研修ツアー

6月3日(火)



六月三日、浄光寺門徒を中心とする三十九名が本多町の鈴木大拙館に集合。当寺とは「お太子さん」のご講師として長きに渡りご縁をいただいております木村宣彰先生（現鈴木大拙館館長）にお忙しい中、館内をご案内いただきました。

当日は企画展「大拙つれづれ草」が開催されており、「Man's Extremity is God's opportunity」(ウィリアム・ジェームズ)、「心」、「△□不異〇」(色不異空)等の大拙の書や、大拙が好んだ猫や牡丹と写る写真などが展示されていました。

木村館長には、禅の世界は勿論のこと、親鸞聖人の教えとの共通点を交えながら、長時間にわたり熱弁を奮って下さいました。先生の「生きる」(普通の生活)ということと「仏道」(行)とは別のことではないという言葉が心に残りました。

また仏教のお話だけではなく、作品の背景や大拙の人間像、さらには建築に纏わるお話まで、ひとつひとつ丁寧にお話下さいまして、またとない今回の貴重なご縁に、ご参加の皆さんも熱心に耳を傾けていらつ

5月の掲示板

ひとりでは  
笑えない  
ひとりでは  
称えられない  
ひとりでは  
生きられない

しゃいました。

### 参加者の声

「鈴木大拙館を訪ねて」

浅森定信・香代子

◆まだ梅雨入りもしていない当日、気温は三十度近く、また湿度も高く連日不快な日々が続くなか、現地集合時間は二時三十分。私たちは初め



ての訪問です。近くの駐車場に車を  
入れ、ぶらりぶらりと入口付近まで  
到着。「玄関はどこだろうか」。アプ  
ローチスペースがゆったりと広がっ  
ている中にいて、一瞬きよきよ。  
「あつここだ」。意外と目につかない、  
ちっちゃな玄関。改めて建物を認識。  
本多の森を背景にその風景に同化し  
ているかのように、建物が気になら  
ない。

玄関から皆さんが集合されている  
場所へ。天井が高く四方各壁の一部  
が開放され穏やかな水面が見える。  
まったく別の空間を感じ、自分の気

持がゆったりと落ち着いた気分にな  
るのを意識していました。同時に不  
思議と今までの不快感は消えていて、  
涼風が心地よくいい気分になってい  
ました。

木村館長のご案内で館内各所の建  
築、展示物の説明にその都度、鈴木  
大拙先生にまつわる色々なお話を聞  
かせていただきました。クスノキが  
見える回廊でのお話、展示空間、学  
習空間でのお話、思索空間に戻って  
のお話。熱く私たちに語っていただ  
きました。

自分たちを振り返ると、いつも「自  
力」で我が強く反省しきりです。人  
が生きる基本を僅かだけでも短い時  
間の中、感じられたことは、今回、  
鈴木大拙館を訪問してよかった事だ  
と思います。

後半に木村館長より「水鏡の庭」  
に面する縁（縁側）のお話がありま  
した。内部でもない外部でもない日  
本人特有の感性、または文化である  
ことを改めて認識いたしました。そ  
んな縁をふんだんに取り入れられ、  
また色々な場面で鈴木大拙先生の思  
いを表現している、そしてそれを感じ



じ取ることができる鈴木大拙館だ  
と感じました。へ館長いわく記念館に  
あらず

今回の訪問を終え、また気持ちも  
新たに日々を過ごしていきける事に、  
お世話をしていただきました浄光寺  
様及びご配慮していただきました木  
村館長に報謝いたします。

帰りは「水鏡の庭」の横道を通  
り中村記念館方向へ、散策の小  
路をぬけ駐車場へと帰途に・・・  
Wonderful Wonderful・・・△□不  
異〇・・・心・・・

「クスノキに迎えられて」

能澤 文栄

◆六月の初めとしては少し暑い午

後、浄光寺様のご縁で、鈴木大拙館  
を訪れました。地元に住ながら、大  
拙の名前だけしか知らない無知のま  
まの参加でした。

中は少し緊張感のある雰囲気では  
したが、木村館長の笑いを交えた柔ら  
かな説明をいただき、「ここでは、鈴  
木大拙を感じて欲しい」との事で、  
心構えが少し変わりました。

展示写真のエピソードをお聞きす  
ると、愛すべきおじいちゃん（大拙）  
とほほえましく存じました。でも若  
干二十四歳で仏教を修得し、貞太郎  
（大拙の本名）に大拙の居士号を授け  
られる等々、一般人には知り得ない  
世界を感じました。

それでも最後に「水鏡の庭」に着  
いた時は、訪れた時とは印象が違っ  
ていました。水、建築物、新緑の木々、  
何ひとつ違和感のない空間、それぞ  
れがそれぞれを生かしている、隙間  
がない、そんなふうに見えました。

次回訪れる時は、また別の見え方  
があるのかと存じます。

今日も玄関のクスノキの幹に座  
り、ニコニコと訪れる人々を観察し  
ているのでしょうか。

## 舟木傳内に観る

映画「武士の献立」でおなじみの料理侍、舟木傳内を世にあらしめた人生観を訪ねる！

昨年来、「加賀藩料理人舟木傳内」が取り上げられ紙上を飾った。また松竹より上映され、加賀料理の基をなした料理人と奉じられることとなった。

舟木（船木・船木・婦南気）家に関する史料として傳内が纏めたいくつかの『料理聞書』、『舟木傳内随筆』、『先祖由緒并一類附帳』、『御婚礼の次第』等が挙げられる。其れを補うものとして菩提寺浄光寺の過去帳等があるものの度重なる大火にみまわれ享和以前の記録はない。四代舟木傳内、知右衛門以後のことである。要するに今から三二五〜一四四年前に奥村家に仕えていた一料理人が人一倍の研究心をもち、苦勞の末、百万石の藩主・家族の御膳は云うまでもなく、藩を挙げてのおもてなし料理の最高責任者としてのし上がっていく物語なのである。

数少ない現存する史料から人物像を描くのは大変難しい。今は享保十年（一七二五年・二九八年前）四月八

日（六月九日に執筆されたと思われる『舟木傳内随筆』から生活信条が少しわかればと思います。なんとなれば時々書かれた文には偽らざる面がでて面白いと云われるのだから。

この随筆は全（その一、その二）で一〇九項からなる雑多な想である。それを項目別に観れば、歴史二〇%、仏教、仏事二〇%、倫（儒教）七、三%、その他二四%、話一一%、武士道二七%、料理一%等々多岐に渉る。（小生、分類）

『ちからぐさ』、『ちからぐさ聞書』等料理関係が多々ある故に改めて書する必要もなかったとも考えられる。しかし、料理関係が一項目のみとは少なすぎる。序文末には「愚痴文盲なる我等がかうざび（功罪）をくわえ、そこ



映画「武士の献立」

はかとなく書付けて子どもにとらすものならじ。是ぞ今歳の江戸土産也。これを傳内を研究する陶智子師は「子どもにとらすものではない」ではなく「子どもにとらすものである」と解す。そこには料理そのものより料理に係わる人の眼、また人間として生きる上での重要視すべき事は何か、傳内の思いを観ずることである。

仏教関係と思しい項目が傳内の生活信条を知る上で参考になるのではと思い少し取り上げてみたい。

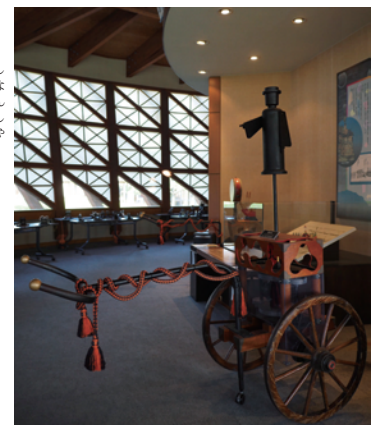
「晨朝に鐘の音を夕には僧の経を聞く」

このような生活環境にあったことは後の人生に大きな影響を与えていくことと無関係ではない。

「愚痴文盲の身を省すれば子には学門諸芸に心がけるよう愚意を添える」

何時の世も親の思いは同じ。ここにも「愚」が用いられるが他にも散見できる。

今回は彼流の「指南」の捉え方が示されている項目に限り感ずるところを記してみたいと思います。なんとなれば



「指南車」大野からくり記念館

ば「指南車」という以前から気になっていた文字が飛び込んできたからに他なりません。

「人に物を教えるを指南と云。むかし唐周の時に南の国越より来たる使者帰る道をわすれたり。その時周公旦車を造つて、その上に木の人形を置けり。この人形南に指。是にしたがってかへりけりと」

真つ先に「指南は教えること」だと書かれているように、指導者としての悩み、料理人は料理の技術さえ教えれば善し、加えてマスターすれば一丁前の調理人なりとする思いに疑問符が付けられてくるようになった。それだけでは真の料理人にはなることはできないのでは。悩みはいよいよ深まっていったでしょう。その過程に中国神話上の「指南車」に邂逅したのではないの



5/7日～26日まで泉野図書館で開催された「舟木伝内資料展」に当寺の資料を提供いたしました。

でしょうか。人一倍苦勞して役付になり、はじめて「指南」と云うことに直面することとなる。その事が傳内の人としての根源的歩みを熟考する縁となつていったのでしよう。

「聖人、佛何ぞ惜しみたもうことあるか」

自己保身を優先して他に教えることを惜しむことがあるのは以ての外。周囲の人を見聞きするなかに、実際自分もまた同様であつてみれば、「頭」という前に人間としてどう在るべきなのかという葛藤が常にあつたのでしよう。歩む一つの方向が定まつた時、子孫、部下達からは各段の信頼が高まつていったことは言うまでもない。

「指南車」の出處は司馬遷の『史記』

に拠る。黃河流域の首領であつた黃帝（紀元前二五一〇～紀元前二四四八年）と長江流域の首領、蚩尤（ちゆう）が涿鹿（河北省涿鹿）野で戦い、蚩尤は種々武器をもつて戦うも及ばず黃帝に滅ぼされる。しかし、蚩尤はギリシャ神話にでる怪物キメラに似て忌むべき大魔神として亀足、蛇首、銅の頭、鉄の額、砂・小石を食すともいわれ、後に軍神とも崇められる。著名な戦である。その時、蚩尤は雨・霧を湧き起こし、黃帝軍を攪乱するのだが、兵士の行き惑うのを見て常に南に人形が指さす車、指南車というものを造り、大霧より軍を導き勝利したというのである。

行くべき道、帰るべき道が分からなくなりながらも指南車のおかげで迷うことなく目的地に行くことができた。料理頭としてのプレッシャーが重くのしかかり、苦惱が増幅されていったことは推測に難くはない。そういう中で中国の神話に登場する指南車が自分を解放してくれる特効薬ように見えたのではないだろうか。

## すっかり忘れていた 人間の入学式

4月の掲示板

指南とは『易経』によると「聖人南面而聴天下 嚮明而治 蓋取諸此也」（聖人は南面して天下を聴き、明けに向かいて世を治。けだし諸をこれに取るなり）とある。倭の国も見習つて、政所を南向きに建設し明るくなるとともに政治することとなつたときく。

指南車の構造などは専門家にお任せして、仏教ではどう捉えていけばよいのでしょうか？

よく「後悔のしないよう、しっかりと歩め」とか「方向を定め前へ」とかいわれるが五里霧中においては方向が全く分からない中、どうしたらよいのかわかるはずもない。一寸難しいことだと思ふ。

最近、カーナビなるものが進み、ど

んな田舎者であつても都会のど真ん中へでも、どのように混み入った路地へも間違ひなく目的地へ案内してもらえらる。洵に便利になつた。それもこれもGPS（全地球測位システム）が出現してからです。そうそう地図を広げたら何をします？まず自分の処を確認して、目的地を選択し、ルートを探しますね。それと同じです。衛星が多く上げられ測位がより正確になり、一説によれば本年中にもう一つあげられる予定とか。そうすれば地上10センチメートル迄識別できるようにになるとか。ようするに自分の居所が明確にな

## 一年中行事一

- 一月「修正舎」元旦（午前0時）
  - 三月「お太子さん」彼岸中日（午後一時）
  - 七月「孟蘭盆」十三日～十六日
  - 八月「追甲舎」十三日（午前十時）
  - 十月「報恩講」十七日（午後一時～七時）  
十八日（午前十時半）
  - 十二月「除夜の鐘」大晦日（午後十一時半）
- ※毎月二十八日「きこまいけ」（午後二時）

ることなのです。分かなければ一歩たりとも歩むことはできないのです。ナビゲーションとはそういうものであり、換言すれば自分探しともいえるのでしよう。運転しておりましても、見知らぬ地域を歩いている時にも無意識のうちに今どこを歩いているのか、目的地に到着するために現在地をインプットしているのです。空を行き交うジャンボ機、戦闘機しかりです。

料理に携わろうとするものは技術の習得も大切な行なのでしようが、料理する本人の根源を訪ねることこそが料理という枠を超えて尤も大事ということなのでしょう。さすれば他の知識や眼に見えるものは自然と身についてくるといふことでしょう。そこに個性もプラスされ「愚」と自覚する人間が味わい深い品を創り出すということでしょう。

その点を伝内は周公旦の行為に涙し、指南車の出現の本意に触れ、目に触れるものよりも目に触れ得ないものの探求こそが人をして人間として歩むことになることと確信することになる。

『大蔵経』によれば「南陽之言為指

「大友楼」当主、大友佐俊氏はいう。「ご先祖より、傳内様には言い尽くせぬお世話になったのだから、船木家のお墓にはお参りをせよと言われ、今も墓参しております」と。ここにも傳内の「意」が窺い知れるというものであろう。



舟木家の墓（野田山墓地）

南車能示迷方 丹霞之発道意 蓋宿殖乎：訪南陽則後見不誤為国師也。南北朝の文学者江淹（四四四〜五〇五年）は「丹霞」を「丹霞蔽陽景 緑泉湧陰渚」と日が映って赤くたなびく雲でさえも、宇宙に満ちれば、明るい太陽の光をも蔽いつくす。一般には美しい光景として捉えられるも、こう説き解している。嫌う黒い霧はいつまでもなく、光を受け赤くたなびく雲、一見美しいと感ずる景も日の光を遮ってしまう。寿光を受け生きている人々をどう生きて善いのか迷わしている因ではないの

かど。その発想は「経」に返していえば、好まぬ「霞」なるを受けて自分では気付かなかつた。隠れておわします菩提心が発かれ出ることになる。そこにこれも宿世の善根かな。因縁かといわれるのです。南陽、すなわち南に後生を高僧に訪ねんがためなり。いうなれば『指南車』は紛うことなく真実なる自己を探し獲得するために必要欠くべからざるものであつたと言えよう。

したがって『南に指さす』いうのは単に「武術」、料理の「技」等の教習に止まらず、その奥義を求め、究めていくのでしよう。その機縁は嫌われた大霧という自我に直面せられたとき、自然と洵の生き方を求め歩むとき、洵の師がおわしますという「南」に方向が定まったということでしょう。傳内

雨が大地を  
潤すように  
涙は人間を潤す  
しみじみと

6月の掲示板

は我が子孫や料理人のみならず、万人がそう在らねばなぬと廣く信じ歩んだことなのでしょう。

今更ながら大経の「所欲聞法 自然得聞」のお言葉あることの尊きを思いつつ、菩提寺として一つの項目をこの機に気ままに伺いさせて戴いたことで

添 墓石に「南無阿弥陀仏」と刻まれているところに安堵する。

我ら同朋の一人なり。

浄光寺前住職 藤 宣章

### きこまいけ

毎月二十八日・午後二時

みんなで『正信偈』のお勤めの練習とお勉強をしています。毎回二十名ほどの方にご参加いただいています。途中参加、初心者の方も大歓迎です。お気軽にお越しください。

○テキスト『赤本』・『書いて学ぶ親鸞のことは正信偈』





# 年中行事

## 除夜の鐘、修正会

大晦日、元旦

揺れる篝火に幻想的に浮かび上がる本堂の前にはどこからともなく集まってこられた参詣者たち。午後十一時三十分、住職の一吼が高らかに鳴り響き、皆さんも後に続きました。天候にも恵まれ、境内では久し



撮影 野関 哲也

ぶりにテントを張つての炊き出し。温かい食べ物や飲み物が振る舞われ冷えた身体を癒やしました。

引き続き本堂では午前0時より「修正会」が勤まりました。お念仏で年が暮れ、またお念仏で新年が始まる。そしてまたお念仏で年を終える。生活の中にお念仏があるのでなく、お念仏の中に私たちの生活があるのだなあとそんなことを感じつつ、皆様とともに新たな一歩を踏み出させていただきました。

## お太子さん

春彼岸

三月二十一日、「お太子さん」（聖徳太子御忌）が執り行われました。先ず中尊前で『正信偈』の唱和、続いて親鸞聖人が聖徳太子を讃仰しお作りになった「太子和讃」のお勤め。その後、聖徳太子のお木像を安置するお厨子の前に移動して太子縁起を拝読。住職就任後初めての拝読のため少し緊張しましたが、当寺に太子像が伝わる不思議と先達のご尽力やご苦勞に思いを馳せながら拝読



させていただきました。続いて万年講、そして『阿弥陀經』の読経。今ここに「今現在説法」される太子のお姿に耳を傾けました。

ご法話は十数年に渡りご縁をいただいております大谷大学前学長で昨年より鈴木大拙館館長に就任されている木村宣彰先生がご多用中にもかかわらず今年もお話しく下さいました。先生のご法話は別紙『結草』No. ⑩にまとめましたので、是非とも熟読ください。ご法話の後、何名かの方が先生に質問をされるなど、充実した「お太子さん」となりました。

## 行事のご案内

### 「追弔会」

八月十三日

午前十時ヨリ

### 法話ライブ 靈河秀樹

本年も旧盆に合わせて「追弔会」を執り行います。お盆、それは亡き人にもう一度出遇い直す場。本当に私たちはご先祖さまに出遇っているといえるでしょうか。ご先祖さまは、何を私たちに伝えようとしてくださっているのでしょうか。皆さんと一緒に訪ねてまいりたいと思います。ご法話には、昨年引き続き福井県より真宗本願寺派玄性寺住職、靈河秀樹師をお迎えいたします。温かい歌声をギターの音色に乗せ、わかりやすく仏様の教えを聞かせてください。去年の感動を再び！

